

アライグマを追いかけて

Vol. 01 新連載スタート & アライグマ対策聖地巡礼

渡邊 英之（ワイルドライフマネジメント事業部 計画策定支援室）

1. 旗揚げに際して

突然ですが、全国民が待ち望んでいたであろう新連載「アライグマを追いかけて」がスタートします!!2000年代初頭から問題になり始めたアライグマですが、対策がうまくいっている話はあまり聞かない。ニュースはもっぱら分布拡大と被害増加です。このアライグマ問題、中々厄介そうですが、まだまだ分からないことが多い…ということで、調べた内容やなんやらを備忘録的に書き連ねようと思います。一度調べたり考えていたりした内容もちょうどどこかにまとめないと自分でも忘れてしまうので、そのまとめたものを共有してしまおうという魂胆です。など、掲載頻度は…未定です。年1本くらいを予定しています。

これまであまりアライグマに興味がなかった方にも是非ご一読いただいて、これからのアライグマ対策どうすればよいのかなどを一緒に考えたり

お話ししたりできたらうれしいなと思います。これからはアライグマ防除の時代ですからね。

なお、この連載ですが、別に私一人で書き続けようとは思っていないので、是非この枠使って皆さんも調べた内容をご投稿いただけたらなと思います!!

2. 時代とともに変化するアライグマ対策の状況

アライグマの具体的な問題や対策について筆をとるまえに、まずはアライグマ対策の変遷を見てみましょう。アライグマは愛玩目的で輸入されました。そんなアライグマが最初に野生化したのは1962年の愛知県犬山市における動物園からの脱走です（楊妻-柳原 2004）。その後、アライグマを主人公とした人気アニメの影響でペットとして人気になりましたが、気性の荒さなどが原因で各地



図1. 主要な外来種対策政策等の変遷（渡邊 2025）

で放逐。それによって野生化が進んだと考えられています（池田 2006）。ただし、当初はペットとして認識が強かったことや、外来種問題自体が社会的に定着していなかったこともあり、現在のような問題意識ではなかったようです。

そもそも、外来種が生態系の問題として社会的に俎上に上がったのが 1992 年の生物多様性条約です。その後、生物多様性国家戦略の策定などを経て、2005 年には外来生物法が策定されました（図 1）。

アライグマも 2000 年以前は捕獲数も少なかったですが、年々増加しており、被害の拡大と激甚化がうかがえます。特に、北海道や関東地方、近畿地方では捕獲数も多く、問題が深刻です。一方で、東北地方や九州南部では分布拡大期であり、問題自体は軽微ですが、低密度での対策が有効な外来種としては最も費用対効果が高いフェーズにあります。このように、アライグマ対策の状況は時代とともに変化しており、特に近年、激甚化が進んでいる状態にあります。

3. 温故知新～アライグマに関する『Field Note』掲載記事～

では、このアライグマ問題を、本機関誌『Field Note』ではどのように取り扱ってきたのでしょうか。1983 年創刊の『Field Note』は今年で 44 年目に突入し、今回で 170 号を迎えます。私は『Field Note』の価値のひとつは、この蓄積にあると考えています。先述のとおり、この期間でアライグマの状況は大きく変わりました。つまり、『Field Note』の記事は、変化していく状況の中で先人たちが歩んできた足跡といえます。そして、この記事もその足跡のひとつです。

ということで、まずはこの『Field Note』の膨大な記事の中で、アライグマがどのように取り上げられてきたかを整理してみました。表 1 はタイトルに「アライグマ」が含まれていた記事とその内容です。これだけでもなんと約 20 本!!この他にも、「外来哺乳類対策の 25 年」（2008 年 No.100）など、アライグマに関する記載が含まれている記事もありました。

また、こうみると、以前にも「アライグマ〇年生の勉強ノート」という連載記事があったことがわかります。初号は 2003 年。生物多様性国家戦略などで外来種問題は取り上げられつつあるものの、まだ外来生物法も施行前（図 1）。アライグマ

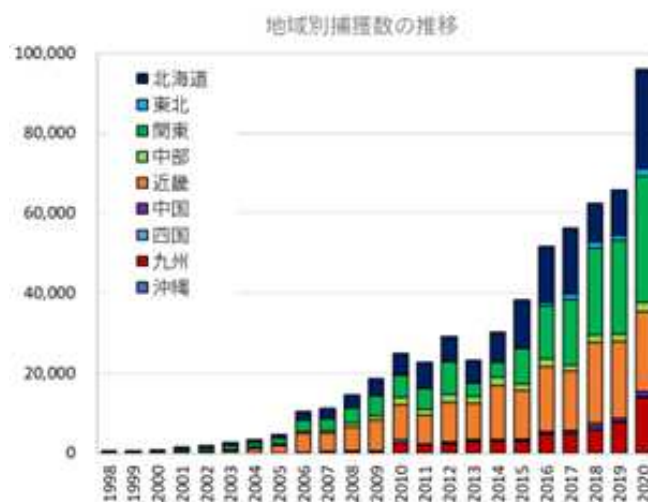


図 2. 地域別捕獲数の推移（環境省 鳥獣関連統計より作成、渡邊 2025）

表 1. アライグマに関する『Field Note』掲載記事（タイトルに「アライグマ」が含まれるもの）

巻号	年	タイトル	内容
No. 70	2001	アライグマについて思うこと	アライグマのフィジカルの強さやアライグマ回虫、鎌倉での調査の苦労など。
No. 79	2003	アライグマ一年生の勉強ノート	アライグマの基礎生態について、Zeveloff (2002) の要約と感想。
No. 83	2004	神奈川県のアライグマ問題解決のための民間団体設立について	民間団体「アライグマ対策@かながわ」の紹介
No. 83	2004	アライグマ二年生の勉強ノート	捕獲効率の分析と各地域の捕獲効率（1 頭捕獲あたりの罠日）のレビュー。アライグマ誘引薬についての記載もある。
No. 87	2005	アライグマ三年生の勉強ノート	和歌山県田辺市での捕獲データについて、解剖学的視点から成長の様相を考察。
No. 91	2006	アライグマ四年生の勉強ノート	当時の外来生物法とその課題、都道府県のリーダーシップの必要性和その欠如。和歌山県田辺市における捕獲個体の mtDNA 分析とその考察。オスの分散力の強さを mtDNA 調査で裏付け。
No. 94	2007	アライグマ五年生の勉強ノート	鳥獣保護管理法の罠規制に対する現場の声。和歌山県田辺市での対策のまとめ。
No. 99	2008	アライグマ六年生の勉強ノート	田辺市におけるアライグマ捕獲個体とジステンパーウイルス
No. 97	2008	アライグマのねぐら	廃屋、納屋、側溝、排水溝、樹洞。アナグマの穴の利用。
No. 103	2009	アライグマ七年生の勉強ノート	アライグマの感染症について。鳥インフルと疥癬。
No. 107	2010	アライグマ八年生の勉強ノート	通年データの取り扱いの難しさ、増加率考えるなら出産率と死亡率も考えなくてはけないという課題提起。
No. 111	2011	アライグマ九年生の勉強ノート	人獣共通感染症とアライグマについて。狂犬病やアライグマ回虫など。
No. 116	2012	アライグマ十年生の勉強ノート	和歌山県田辺市における 2011 年度の捕獲結果の分析。
No. 120	2013	アライグマ 11 年生の勉強ノート	近畿におけるアライグマ捕獲減少の謎、タイガー製アライグマトラップの活用。
No. 119	2013	野生動物による被害を考える～実践アライグマ被害対策 前編～	著者が借りている市民農園にアライグマがやってきた!! 前半戦はアライグマの勝利...
No. 124	2014	アライグマ 12 年生の勉強ノート	アライグマとタヌキの疥癬について。アライグマは疥癬で死ににくい!?
No. 132	2016	アライグマ勉強ノート no. 13	田辺市の捕獲情報の分析・考察。
No. 140	2018	アライグマ勉強ノート no. 14	田辺市の捕獲情報の分析・考察と、齢査定方法の検討。
No. 160	2023	学会参加報告—行政計画とアライグマ対策技術について—	哺乳類学会大会 2023 の発表を聞いての、アライグマ関連の考察。

問題が一部で顕在化しはじめた時代です。現在のアライグマ対策関係者間での共有知見がまだないところに、暗中模索で対策を進めてきた過程が記されていました。2002年には基礎情報の文献調査だった「勉強ノート」は、2005年には実際の現場知見が伴った分析となりました。また、近年特に問題視されている、アライグマの公衆衛生被害については、なんと2008年ごろに既に言及されていました。すごい……こうなると、実際に著者の方に取材したくなりますね!!ということで行ってまいりました。

4. 聖地巡礼～アライグマ連載記事著者に会いに行ってきた～

2018年まで続いていた連載「アライグマ勉強ノート」の主な舞台は、和歌山県田辺市。著者は田辺市ふるさと自然公園センターの鈴木和男氏です。アライグマ研究で度々引用されている『田辺市におけるアライグマ調査報告書』(田辺鳥獣対策協議会 2005)や『田辺鳥獣害調査研究報告書』(田辺鳥獣対策協議会 2007)、『田辺鳥獣害調査研究報告』(田辺鳥獣対策協議会 2009)の現場でもあります。「アライグマ勉強ノート」にも上記3文献にも共通する特徴が膨大なデータ量です。そのデータが収集されている地に、2025年6月、行ってまいりました。

連載「アライグマ勉強ノート」が最後に投稿されたのは2018年ですが、鈴木氏は今でもご健在でデータの収集と分析を続けておられました。有害鳥獣捕獲で捕獲されたアライグマ等の中型野生獣の個体のデータを収集しており、その数は年400頭にもものぼります。捕獲数だけではなく、捕獲個体情報も収集分析されています。捕獲日付・齢・性・頭胴長・体重・妊娠状況(妊娠頭数や泌乳頭数)・胎児重などの個体データを計測後、肋骨・大腿骨・陰茎骨など一部の骨を骨格標本として作成・保管しておられました(図4)。



図3. 田辺市ふるさと自然公園センター



図4. 収集された骨格標本の例

これらのデータはアライグマの生息状況を把握するために、重要な意味を持ちます。たとえば、アライグマはオスがまっさきに分散するため、性比は定着状況を把握するための指標になります(浅田 2013)。また、通年で収集されたデータは、アライグマの成長の様子を反映するため、基礎生態情報としても重要な学術的な意味を持ちます。

20年以上、毎年収集されている圧倒的なデータ量を前に、私はあつけにとられてしまいました。バイタリティ溢れるパワフルで偉大な先達に少しでもついていけるよう、精進いたします。

5. 次回予告!今後の展望

次回以降、筆者は、まずアライグマ問題の概念や全国的な状況などマクロスケールの内容を深掘りしていきたいと考えています。アライグマ対策に携わっていると「アライグマ、根絶できないなら対策する必要があるのか?」といったご質問をいただくことがありますので、そのアンサーも改めて書きたい。2026年には茨城県・千葉県・栃木県・東京都・山梨県・大阪府などのアライグマ防除実施計画が改定されたのもあって、各地のアライグマ対策のレビューもしたい。色々書きたいことがあります。

また、筆者が変わると視点も変わり、深みが出るでしょう。私以外の方にもぜひ書いてほしいです。捕獲現場のあなた。アライグマ獣医師のあなた。データ分析が得意なあなた。アライグマに食べられてしまう在来種に詳しいあなた。最近アライグマ問題が気になり始めたあなた。本シリーズ

『アライグマを追いかけて』はみんなで、アライグマ問題について意見を出し合う場になるといいなと思います。

ひとまず vol.1 はこれまで!!では、また。

6. 引用文献

揚妻-柳原芳美. 2004. 愛知県におけるアライグマ野生化の過程と今後の対策のあり方について. 哺乳類科学 44(2): 147-160.

浅田正彦. 2013. ニホンジカとアライグマにおける低密度管理手法「遅滞相管理」の提案. 哺乳類科学 53(2): 243-255.

池田透. アライグマ対策の課題. 哺乳類科学 46(1): 95-97.

田辺鳥獣対策協議会. 2005. 田辺市におけるアライグマ調査報告書.

田辺鳥獣対策協議会. 2007. 田辺鳥獣害調査研究報告書.

田辺鳥獣対策協議会. 2009. 田辺鳥獣害調査研究報告書Ⅱ.

渡邊英之. 2025. 国内外の外来種対策のビッグウェーブ. ワイルドライフフォーラム 29(2): 3-5.



表紙の絵

今年も春が訪れ、暖かくなってきました。春といえば、鳥たちの繁殖期ですね。

国内に生息するカワウも、殆どが春から初夏にかけて繁殖期のピークを迎えます。

しかし、地域によっては、夏や秋どころか、真冬から繁殖活動を開始したり、環境に合わせて自由自在に生きています。

そんなカワウの生命力には感嘆せざるを得ません。

今回は、カワウの生命力を表現するため、5つの卵を描いてみました。黒、緑、黄、赤、白……。

一般的には、一つの巣あたり平均3~4個の卵を産むと言われていますが、たまに卵が5個6個もある巣を見つけることもあります。

そんな巣を見つけたときは、親鳥たちと、これから孵化するであろう5羽のヒナたちの成長を見届けたい気持ちになります。

加藤 洋 (管理本部)